

地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究

——依頼型のボランティアに着目して——

内 藤 正 和*

近年、地域のスポーツイベントや総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団等においてボランティアは重要な地位を占めるようになった。特に地域のスポーツイベントにおける依頼型のボランティアは重要な存在であり、依頼によってボランティアを確保しなければならない状況である。

そこで本研究は、地域のスポーツイベントにおける依頼型のボランティアに着目し、その参加動機、意識等について明らかにすることを目的とした。

その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 依頼型のボランティアの多くは、地域において、ボランティア経験が豊富であるか、ボランティアを初めて行うかという二極化の傾向がある。
- 2) 依頼型のボランティアの参加動機について、「地域貢献」、「自己実現」、「レジャー」、「スポーツ」、「依頼」の5つの因子を抽出することができた。依頼型のボランティアの参加動機は、一般的なボランティアの参加動機と同様の傾向を示すことが明らかとなった。
- 3) 依頼型のボランティアは、低年齢層において、一般的なボランティアに比べ、利己的動機は少なく、依頼されて地域のために参加しているという意識が強いことが推察された。
- 4) 依頼型のボランティアであっても、高い満足度を得ることができること、継続性を持つことが可能であることが示唆された。また依頼型のボランティアにとって、実費の支給はあまり重要なことではないことが推察された。

キーワード：volunteers of request type, participation motive, regional sports events

I. はじめに

近年、地域のスポーツイベントや総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団等においてボランティアは重要な地位を占めるようになった。さらにFIFAサッカーワールドカップ、オリンピック、国民体育大会等の全国・国際的なスポーツイベントにおいては、多くのボランティア応募があり、抽選になるほどであった。東京マラソン第2回大会では、ボランティアの応募が募集定員の12,000人にすぐに達してしまうほど、ボランティアの人気は高かった(遠藤, 2008)。SSF 笹川スポーツ財団の「スポーツライフデータ2008」をみても、スポーツボランティアの実施率は15.8%であり、成人人口1億263万人(平成17年度の住民基本台帳による)

からみると、約1,620万人の成人がスポーツボランティア活動への参加を希望していることになる(SSF 笹川スポーツ財団, 2008)。

しかしながら、FIFA サッカーワールドカップ、オリンピック、国民体育大会等の全国・国際的なイベントにおいては多くのボランティアが参加しているが、地域のスポーツイベントや総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団等の指導者や運営を行う人などの日常的な活動を支えるボランティアは十分な人数を確保できているとは言い難い。地域のスポーツイベントや総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団等におけるボランティアは運営側から依頼されて参加する人が多いのが現状である。SSF 笹川スポーツ財団の調査においても、スポーツボランティア活動のきっかけと

* 愛知学院大学心身科学部健康科学科
(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: naito@dpc.agu.ac.jp

して「スポーツ関係の団体や連盟から頼まれて行った」、「友人や知人から頼まれて行った」、「町内会や職場のグループから頼まれて行った」と回答した依頼型の実施者が全体の83.5%を占めていた（SSF 笹川スポーツ財団, 2004）。

特に地域のスポーツイベントにおいては、総合型地域スポーツクラブや、スポーツ少年団等の定期的な活動とは異なり、イベントの開催ごとに、ボランティアを集めなければならず、現状を考えると、必然的に依頼型のボランティアが多数を占めるようになるといえる。今後もこの傾向は継続していくと考えられる。

以上より、地域のスポーツイベントにおいて、依頼型のボランティアは重要な存在であり、参加動機や意識等を把握・分析することは、大変重要なことである。これまで、スポーツイベントにおけるボランティアの参加動機・意識等を明らかにする研究は行われてきた（長ヶ原ら, 1991：松本, 1999：松本ら, 2004：森谷, 2002）。また、スポーツイベントのボランティアに参加する決定要因を明らかにした研究も行われている（前田ら, 1997）。しかしながら、参加方法の違いに着目した研究は行われていない。

よって本研究は、地域のスポーツイベントにおける依頼型のボランティアに着目し、その参加動機、意識等について明らかにすることを目的とする。

II. 依頼型ボランティアにおける自発性の検討

ボランティアとは、広辞苑によると、「志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人。」（広辞苑, 2008）と定義されている。田尾によると、ボランティアの理念として、「自発性」、「無償性」、「利他性」を挙げており、ボランティアは自発的でなければならないとしている（田尾, 2004）。

ボランティアの自発性という意味は、厳密に考えると「何らかの生物的必要性或経済的必要性に迫られた行為ではなく、また物理的ないし社会的に強制されて行う行為でもない」（内海ら, 1999）ということになる。では今回、研究対象とする依頼されて参加したボランティアは、ボランティアではないということになるのであろうか。入江によると、自発性を厳密に限定してしまうと、ボランティア活動は、全く理由もなく行われる行為ということになる。人間にとって、このような行為は存在せず、自発性を厳密に捉えることは意味のないことであると論じ、依頼されて参加することは1つのきっかけに過ぎないとしている（内海ら,

1999）。

このことは、中央教育審議会においても審議されており、その答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」において、自発性の取り扱いとして、「奉仕活動等においては個人の自発性は重要な要素であるが、社会に役立つ活動を幅広くとらえる観点からすれば、個人が様々なきっかけから活動を始め、活動を通じてその意義を深く認識し活動が続けるということが認められてよいと考えられる。特に学校教育においては、『自発性は活動の要件でなく活動の成果』ととらえることもできる。」（中央教育審議会, 2002）と述べられている。

このように、依頼型参加とボランティアの自発性は矛盾するものではなく、依頼型参加は、ボランティア活動のきっかけであり、ボランティアの活動そのものの自発性を損なうものではないといえる。しかしながら、単に依頼と言っても、気軽にお願いされることから、半ば強制的に頼まれることまで考えられ、これらを全て含めて、自発性と矛盾しないと捉えてよいのだろうか。

上述のように、自発性を考える場合、ボランティア活動そのものに焦点を当てるべきであり、活動そのものに強制力があるかといった視点が必要である。義務的に参加した場合でも、自らの判断によって活動を行っているか、などの活動における自発性が確保されているならば、自発性があると判断できるといえる。しかし、これらは人間の内面的問題であり、参加者の参加動機や満足度などから検討していくことが重要である。

また近藤は、たとえ自分の余暇・余裕において、自分の労働力を援助の求められているところに贈与することであっても、他のものによって命令され強制されるものは「勤労奉仕」と呼び、ボランティアとは区別している。ここでいう強制とは、「しない自由」があるかどうかであり、やめることができる自由がない場合、強制であり、自発性がないと判断できるとしている（近藤, 1998a：近藤, 1998b）。

以上より、依頼型のボランティアは、ボランティアの理念である「自発性」と矛盾するものではないといえる。ボランティアの自発性は、活動そのものに自発性が確保されていることが重要である。

III. 研究方法

1. 調査対象

愛知県日進市で開催された「2009にしんわいわい！ マラソンウォーク大会」(2009年3月8日実施、以下、大会とする)のボランティアの内、所属団体や主催者から依頼されて参加した者を対象とした。

2. 調査概要

ボランティア終了後、調査用紙を直接配布し、その場で回収を行った。配布数は69、有効回答数は57(有効回答率82.6%)であった。この中から、依頼されて参加したボランティア(有効回答数51)を抽出し、分析を行った。

3. 調査内容

調査項目は、個人的属性、ボランティア参加、参加動機、ボランティア内容、今後のボランティア継続について尋ねた。参加動機項目については、先行研究(長ヶ原ら, 1991; 松本, 1999; 松本ら, 2004; 松岡ら, 2002; 内藤, 2007; 桜井, 2002)を検討し、30項目を作成した。尺度には、「1. あてはまる」から「5. あてはまらない」のリッカートタイプ5段階評定尺度を用いた。

4. 分析方法

各項目において、サンプルの属性、ボランティア参加については単純集計又はクロス集計を用いて検討を行い、クロス集計に関しては χ^2 検定を行った。ボランティアの参加動機構造については、因子分析(バリマックス回転)を行った。参加動機構造の差異については、それぞれt検定を行った。なお統計解析には、全てSPSS17.0J for Windowsを用いて行った。

IV. 結果と考察

1. サンプルの属性

サンプルの属性を表1に示した。性別は男性が62.7%、女性が37.3%と3分の2が男性、3分の1が女性であった。年代を見ると、40歳代～60歳代が全体の約80%を占め、20歳代～30歳代は8.9%であった。職業は会社員が一番多く、27.5%であった。次いで、無職19.6%、パート・アルバイト17.6%、専業主婦15.7%、自営業13.7%であった。居住地は、市内在住がほとんどを占め、92.2%であった。市外在住は7.8%で

あった。

表1 サンプルの属性

属 性	n	(%)
性別		
男性	32	62.7
女性	19	37.3
年齢		
20歳代	3	5.9
30歳代	1	2.0
40歳代	14	27.5
50歳代	12	23.5
60歳代	15	29.5
70歳以上	6	11.8
職業		
会社員	14	27.5
自営業	7	13.7
専業主婦	8	15.7
パート・アルバイト	9	17.6
無職	10	19.6
その他	3	5.9
居住地		
日進市内在住	47	92.2
日進市外在住	4	7.8

n=51

2. ボランティア参加について

大会のボランティア参加回数を図1に示した。初めて参加した人が一番多く、45.1%であった。次いで、5回目以上と回答した人が多く、33.3%であった。これらより参加者の多くが、初めて参加した人か5回目以上の長年参加している人に二極化しているといえる。

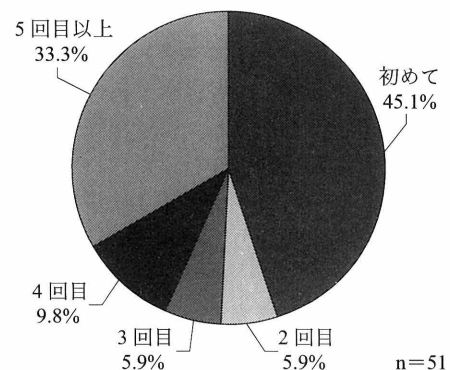


図1 ボランティア参加回数

大会のボランティア参加回数と大会以外のボランティア参加経験をクロス集計し、 χ^2 検定を行ったものを表2に示した。その結果、他のスポーツイベントのボランティア経験がある人となない人で有意な差が見られ

た。大会以外のボランティアを経験している人は、大会のボランティア参加回数が多い傾向にあり、他のスポーツイベントでボランティアを経験したことがある人の約3分の2が、大会に4回目以上参加していた。また大会以外のボランティアを経験していない人の73.9%が大会のボランティアに初めて参加していることが分かった。このことから、依頼型のボランティアの多くは、地域において、ボランティア経験が豊富であるか、ボランティアを初めて行うかのどちらかの特性を有しているといえる。

表2 ボランティア経験

他のイベント 経験 大会参加回数	参加したこと がある		参加したこと がない		χ^2 検定
	n	(%)	n	(%)	
初めて	6	21.4	17	73.9	$\chi^2=17.187$ $p<0.005$
2回目	3	10.7	0	0.0	
3回目	1	3.6	2	8.7	
4回目	4	14.3	1	4.3	
5回目以上	14	50.0	3	13.0	
合計	28	100.0	23	100.0	

3. 参加動機の構造について

参加動機30項目に対して、因子分析を行った。まず、30項目の平均値、標準偏差を算出した。そして天井効果及びフロア効果の見られた2項目を以降の分析から除外した。

次に残りの28項目に対して、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化が、11.01, 3.11, 2.24, 2.03, 1.69, 1.33, 1.21, ……であることより、5因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度5因子を仮定して、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった2項目を分析から除外し、再度主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。バリマックス回転後の最終的な因子パターンを表3に示す。なお、回転後の5因子で26項目の全分散を説明する割合は69.72%であった。

第1因子は9項目で構成されており、「イベント（プログラム）を盛り上げたいから」、「活動を通して地域の役に立ちたいから」、「地域にとって重要なイベントであるから」、「ボランティア活動に興味があるから」など、地域を盛り上げたい、地域の役に立ちたいという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「地域貢献」と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「自分の知識

や経験を活かしたいから」、「新しい知識や経験を活かしたいから」、「自分自身が成長したいから」、など、今回のスポーツイベントに参加して、自分自身の知識や経験を高めたいという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「自己実現」と命名した。

第3因子は5項目で構成されており、「毎年恒例となっているから」、「楽しみたいから」、「気分転換になるから」など、ボランティアをすることで、自分自身の余暇を充実させ、自己の生活をより豊かなものにしたという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「レジャー」と命名した。

第4因子は5項目から構成されており、「参加者（アスリート）に関心があるから」、「参加者（アスリート）と交流できるから」、「イベント（プログラム）に興味があるから」など、運動・スポーツに興味があり、参加者（アスリート）に何らかの支援をしたいという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「スポーツ」と命名した。

第5因子は2項目から構成されており、「知人や友人から依頼されたから」、「大会運営側から依頼されたから」である。依頼されて参加したという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「依頼」と命名した。

各参加動機因子の安定性については、信頼性係数クロンバックの α 値を用いて算出した。その結果、第1因子から第4因子までは $\alpha=0.8$ 以上となり、信頼性が高いといえる。第5因子は $\alpha=0.625$ と良くはなかったが、再考が必要なレベルではなかったため採用し、妥当性は適合度の観点から十分な値が得られた。

ボランティアの参加動機は、大きく分けると利他的動機、利己的動機、その他の動機に分類され、ボランティアは複数の参加動機によって、活動に参加している（桜井, 2007）。利他的動機とは、自分以外のものの利益になるような動機であり、利己的動機は自分の利益になるような動機のことである。

これまでの先行研究において、利他的動機が主要な動機であり（松本, 1999：長ヶ原ら, 1991）、本研究においても、第1因子の「地域貢献」が寄与率：23.28%であることから、先行研究と同様の結果を得ている。その次に、「自己実現」、「レジャー」といった利己的動機が高い寄与率を占めている。また、その他の動機に分類される「スポーツ」、「依頼」の因子を抽出した。「スポーツ」の因子については、大会運営者が各競技団体に依頼し、スポーツに関心のあるボランティアが集まったことからこの因子が抽出されたと考えられ

表3 ボランティア参加動機構造

項 目	因 子				
	1	2	3	4	5
イベント（プログラム）を盛り上げたいから	.890	.288	.034	-.038	-.019
活動を通して地域の役に立ちたいから	.814	.036	.158	.238	-.051
イベント（プログラム）運営に役に立ちたいから	.711	.148	.157	-.003	.183
他人の役に立ちたいから	.703	-.017	.399	.299	.207
スポーツ活動を支援したいから	.678	.185	.063	.399	-.116
多くの人と出会いたいから	.658	.125	.501	.084	-.155
社会的な視野を広げたいから	.656	.543	.234	-.015	.033
ボランティア活動に興味があるから	.641	.171	.233	.324	.051
地域にとって重要なイベントであるから	.631	.124	.147	.215	-.029
自分の知識や経験を活かしたいから	.306	.799	.083	.241	.029
新しい知識や経験を得たいから	.205	.751	.129	.052	.057
身につく技術や技能や知識が得られるから	-.038	.724	.151	.189	-.119
自分自身が成長したいから	.460	.653	.519	-.019	.095
ストレス解消したいから	.082	.445	.277	.380	-.327
日常生活に張り合いを持ちたいから	.297	.318	.736	.108	.121
毎年恒例となっているから	.092	-.063	.709	.435	-.073
楽しみたいから	.414	.267	.685	.204	-.011
気分転換になるから	.246	.382	.608	.302	.048
余暇時間を有効に使いたいから	.373	.412	.537	-.011	-.363
参加者（アスリート）に関心があるから	.172	.066	.087	.696	.041
参加者（アスリート）と交流できるから	.309	.260	.240	.685	.045
イベント（プログラム）に興味があるから	.266	.445	.198	.653	.106
参加者（アスリート）の活動を支援したいから	.567	-.146	.124	.595	.005
他人から認められたいから	-.173	.356	.396	.535	-.116
知人や友人から依頼されるから	-.152	.181	.095	-.072	.945
大会運営側から依頼されたから	.272	-.202	-.088	.161	.605
累積寄与率	23.28	30.02	51.30	63.19	69.72
クロンバックの α 係数	.899	.852	.847	.819	.625

る。先行研究においても、スポーツに関連する因子は抽出されており、本研究では同様の結果を示したといえる（松本, 1999；松本ら, 2004；松岡ら, 2002）。「依頼」の因子については、本研究が依頼型のボランティアを対象にしたことから推察することができる。

これらのことから、依頼型のボランティアにおいても、利他的動機、利己的動機、その他の動機といった複数の動機を持っているといえる。以上より、依頼型のボランティアの参加動機は、一般的なボランティアの参加動機と同様の傾向を示すことが明らかとなった。

4. 個人的属性やボランティア活動経験による参加動機構造の差異について

次に因子分析によって抽出された参加動機の5つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、個人的属性やボランティア活動経験による参加動機構造の差異をt検定を用いて検討した。

まず性別による参加動機構造の差異について有意な差は見られなかった（表4参照）。谷田によると、大学生において、女子学生は利己的動機が強く、男子学生は利他的動機が強いと報告している。また桜井の研究においても、性別によって、参加動機構造に差異が見られた。このように、これまでの研究の多くで性別による参加動機構造に差異が見られたが、依頼型のボ

表4 性別による参加動機構造の差異

項目	男性	女性	t 値	p 値
地域貢献	3.27	3.44	-0.752	n.s
自己実現	2.54	2.74	-0.669	n.s
レジャー	2.86	3.05	-0.682	n.s
スポーツ	2.77	2.55	0.848	n.s
依頼	3.48	3.81	-0.861	n.s

表5 年代による参加動機構造の差異

項目	低年齢層	高年齢層	t 値	p 値
地域貢献	3.21	3.50	-1.242	n.s
自己実現	2.36	3.15	-2.827	p<0.05
レジャー	2.76	3.29	-2.414	p<0.05
スポーツ	2.47	3.11	-3.013	p<0.05
依頼	3.80	3.28	1.475	n.s

表6 ボランティア経験による参加動機構造の差異

項目	経験なし	経験あり	t 値	p 値
地域貢献	3.27	3.34	-0.244	n.s
自己実現	2.46	2.71	-0.837	n.s
レジャー	2.93	2.93	0.000	n.s
スポーツ	2.44	2.80	-1.398	n.s
依頼	3.83	3.50	-0.913	n.s

ランティアにおいては、性別は参加動機構造とは関係ないことが考えられる（谷田, 2001：桜井, 2002）。

年代による差異については、60歳未満を低年齢層、60歳以上を高年齢層とし、分析を行った（表5参照）。その結果、「自己実現」、「レジャー」、「スポーツ」において、低年齢層より高年齢層の方が高く、有意な差が見られた。先行研究においては低年齢層の世代で、利己的動機が強い傾向が示唆されているが、本研究では高年齢層の世代の方が強い傾向が見られた。このことから依頼型のボランティアは、低年齢層において、一般的なボランティアに比べ、利己的動機は少なく、依頼されて地域のために参加しているという意識が強いことが推察される（柴田ら, 2004：桜井, 2002）。

ボランティア活動経験の有無による、参加動機構造の差異について検討した（表6参照）。全体的に活動経験のある方が得点が高い傾向にあったが、有意な差は見られなかった。桜井の研究においても活動経験がある方が得点が高い傾向にあった（桜井, 2002）。活動経験がある方が、活動経験がない方より、動機を強く持って参加する、または動機を強く意識して参加する傾向が見られたが、依頼型のボランティアにおいて活

動経験の有無は参加動機の種類とは大いに関係しているとはいえない。

5. ボランティア参加に関する意識について

活動の満足度について、図2に示した。「まあまあ満足している」と回答した人が一番多く、73.5%であり、「すごく満足している」と回答した人と合わせると、98.0%の人が活動に満足したと回答している。大会運営上、ボランティアの参加はなくてはならないものであり、大会のステークホルダーの1つとして捉え、高い満足度を感じてもらうことは、運営を円滑に行うことにつながる（新出, 2006：松岡, 2003）。つまり、ボランティアの満足度という観点からは、大会運営側のマネジメントは成功したといえ、依頼型のボランティアであっても、高い満足度を得ることができると示唆された。

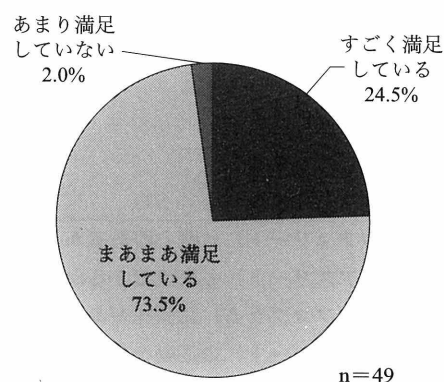


図2 活動の満足度

次に実費の支給の必要性について、図3に示した。実費の支給については、SSF 笹川スポーツ財団のスポーツ・ボランティアの定義によると、「報酬を目的とせず、自分の労力・技術・時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進（レクリエーションも含む）のために行う活動である。ただし活動に必要な交通費等の実費程度の金額の受け取りは報酬に含まない。」としており（SSF 笹川スポーツ財団, 2006）、交通費等の実費と報酬を区別している。これは、実費は報酬ではなく、実費の受け取りはボランティアの理念に反していないことを意味している。

大会において、実費の支給はしておらず、参加者には弁当のみ配布された。実費の支給については「必要だと思う」と回答した人は25.0%で、参加者の4人に1人が必要性を感じており、残りの75.0%が必要性を感じていない。依頼型のボランティアは、依頼されたからといって、必ずしも実費の支給を望んでいるわけ

ではなく、むしろ必要性を感じていない人の方が多い。よって、ボランティアに参加する要因と、実費の支給は関係性があまりないといえ、依頼型のボランティアにとって、実費の支給はあまり重要なことではないことが推察される。

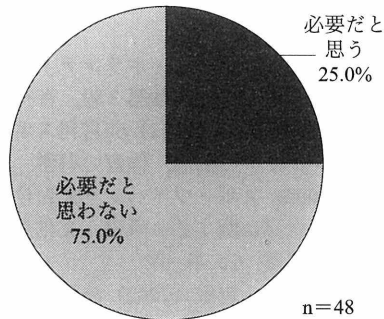


図3 実費の必要性

今後の継続性については図4に示した。「大会にも他のスポーツイベントにも参加したい」と回答した人が一番多く、40.9%であった。次いで、「大会なら参加しても良い」、「他のスポーツイベントなら参加しても良い」が29.5%、15.9%であった。今後の継続性を示した人の割合は86.4%であり、多くの人が今後の継続性を示した。望月らの研究によると、ボランティア継続に影響を与える要因の一つに「他人や社会のために役に立ちたいと思ったから」という動機を挙げており（望月, 2002）、本研究でもボランティア参加の主要な動機として利他的動機が挙げられていることから、継続性には利他的動機を持つことが重要であり、依頼型のボランティアにおいても、継続性を持つことが可能であると示唆された。また「大会なら参加しても良い」が「他のスポーツイベントなら参加しても良い」より高い割合を示したことは、大会が地域にとって重要なスポーツイベントであると考えられる。

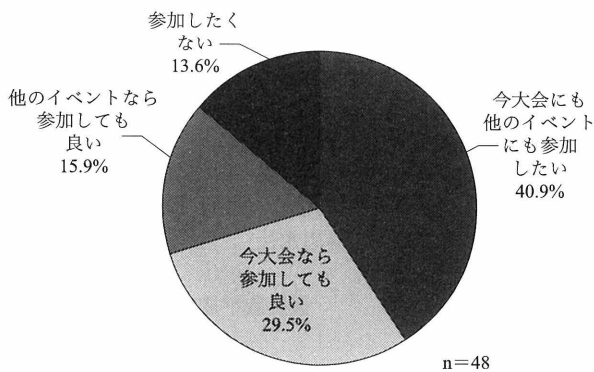


図4 今後の継続性

V. まとめ

本研究は、地域のスポーツイベントのボランティアに依頼されて参加した人を対象に、個人的属性、ボランティア参加、参加動機、ボランティア内容、今後のボランティア継続について、質問紙調査を実施し、単純集計、クロス集計、 χ^2 検定、t検定、因子分析を用いて検証してきた。その結果、依頼型のボランティアにとって、下記の重要な事項を示唆することができた。

1) 大会のボランティア参加回数が多い人は大会以外のボランティアも経験したことがあり、大会のボランティア参加回数が初めてかあるいは少ない人は大会以外のボランティアを経験したことがないという傾向が見られた。よって依頼型のボランティアの多くは、地域において、ボランティア経験が豊富であるか、ボランティアを初めて行うかという二極化の傾向があるといえる。

2) 依頼型のボランティアの参加動機について、参加動機26項目を用いて因子分析を行ったところ、「地域貢献」、「自己実現」、「レジャー」、「スポーツ」、「依頼」の5つの因子を抽出することができた。これらの因子構造は利他的動機、利己的動機、その他の動機と分類でき、依頼型のボランティアの参加動機は、依頼型や応募型全てを含めた一般的なボランティアの参加動機と同様の傾向を示すことが明らかとなった。

3) 因子分析によって抽出された5つの下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、個人的属性やボランティア活動経験による参加動機構造の差異を検討した。その結果、依頼型のボランティアは、低年齢層において、一般的なボランティアに比べ、利己的動機は少なく、依頼されて地域のために参加しているという意識が強いことが推察された。また性別や活動経験の有無は参加動機の種類とはあまり関係性がないことが示唆された。

4) 依頼型のボランティアであっても、高い満足度を得ることができること、継続性を持つことが可能であることが示唆された。また依頼型のボランティアにとって、実費の支給はあまり重要なことではないことが推察された。

以上の結果より、今後、地域のスポーツイベントにおいて、依頼型のボランティアを活用する場合、運営担当者は、依頼型のボランティアの特性を把握することが重要であると考えられる。特に参加動機について、利他的動機、利己的動機、その他の動機があることを認識し、ボランティアの募集やマネジメントに活用す

ることが必要となる(桜井, 2002)。

まずボランティアの募集・依頼の際に、これらの動機を誘引するような方法を取ることで、ボランティアを確保しやすくなると考えられる。例えば、地域に貢献していることやこれまでの大会におけるボランティアの評価などを案内に盛り込むことなどを挙げることができる。また、実際の活動内容についても、これらの動機を意識しやすいものにすることが重要である。活動内容の説明などで、メリットや活動内容の意義を伝え、理解してもらうことなどが考えられる。

そうすることにより、依頼型のボランティアであっても、自発的に活動し、満足感を得ることにつながり、継続性を持つことができるといえる。

今後の課題として、依頼型のボランティアについて、さらに調査を進めていくことや同一イベントにおける応募型のボランティアとの比較などが求められる。

謝 辞

本研究の調査において、日進市教育部生涯学習課主幹山本健一氏を始めとする大会実行委員、ボランティアの皆様のおかげで協力をいただきましたことを、心からお礼申し上げます。

引用参考文献

- 広辞苑第六版(2008) 岩波書店。
 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫(1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2) —ボランティアの継続意欲の視点から—, 研究紀要, 6: 69-75.
 遠藤雅彦(2008) 東京マラソン, ベースボール・マガジン社。
 中央教育審議会(2002) 「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」 答申。
 近藤良樹(1998a) ボランティアと個人の自発性, HABITUS, 1998年5月: 35-47。
 近藤良樹(1998b) ボランティアにおける「任意性」規定の意義, HABITUS, 1998年7月: 49-58。
 前田博子・川西正志(1997) スポーツボランティアの情報チャンネルに関する研究 —1995年世界体操選手権鯖江大会について—, 体育・スポーツ科学, 6: 19-28。
 松本耕二(1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究 —障害者スポーツイベントのボランティアに着目して—, 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5: 11-19。

- 松本耕二・北村尚浩・國本明徳・仲野隆士(2004) スポーツ・ボランティアの参加動機, 組織コミットメントと継続意欲 —地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア—, 山口県体育学研究, 47: 13-22。
 松尾哲矢(1998) スポーツボランティア活動参加の規定要因に関する実証的研究 —スポーツ及び生涯学習に関する認知/行動要因の影響を中心に—, 福岡大学体育学研究, 28-2: 33-51。
 松岡宏高(2003) スポーツ・ボランティアを知る, 原田宗彦編著 スポーツ産業論第3版, 杏林書院: 103-113。
 松岡宏高・小笠原悦子(2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機, 体育の科学, 52-4: 277-284。
 森谷直樹(2002) スポーツイベントにおけるボランティア参加者の意識に関する一考察, 文化女子大学室蘭短期大学研究紀要, 25: 41-49。
 望月七重・李政元・包敏(2002) 高齢者のボランティア活動(参加・継続意欲)に与える要因 —高齢者大学の社会還元活動実態調査から—, 社会学部紀要, 91: 181-193。
 内藤正和(2007) 大学生のスポーツ・ボランティア参加に関する研究 —活動へのニーズに着目して—, 日本体育・スポーツ政策学会第17回大会プログラム: 13-14。
 新出昌明(2006) スポーツ・ボランティアの組織化, 山下秋二・中西純司・畑功・富田幸博編著 改訂版スポーツ経営学, 大修館書店: 296-301。
 桜井政成(2002) 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析 —京都市内のボランティアを対象とした調査より—, The Nonprofit Review, 2-2: 111-122。
 桜井政成(2007) ボランティアマネジメント —自発的行為の組織化戦略, ミネルヴァ書房。
 柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫(2004) ボランティア活動の動機における自発性と外発性, 国際社会文化研究所紀要, 6: 119-131。
 SSF 笹川スポーツ財団(2004) スポーツ・ボランティア・データブック, 笹川スポーツ財団。
 SSF 笹川スポーツ財団(2006) スポーツライフ・データ2006, 笹川スポーツ財団。
 SSF 笹川スポーツ財団(2008) スポーツライフ・データ2008, 笹川スポーツ財団。
 谷田勇人(2001) 福祉ボランティア活動をする大学の動機分析, 社会福祉学, 41-2: 83-93。
 田尾雅夫(2004) ボランティア・NPO・NGO とは何か, 田尾雅夫・川野祐二編著 ボランティア・NPO の組織論 —非営利の経営を考える—, 学陽書房: 11-24。
 内海成治・入江幸男・水野義之(1999) ボランティア学を学ぶ人のために, 世界思想社。

最終版平成21年6月18日受理

A Study of Sports Volunteers in Regional Sporting Events —With Particular Attention to Volunteers of the Request Type—

Masakazu NAITO

Abstract

In recent years, sports volunteers have occupied an important position in regional sporting events, public sports clubs, and junior sports clubs. Especially, in regional sporting events, volunteers of the request type are important, because most volunteers participate after having being requested.

In this research the objective was to examine volunteers of the request type in regional sporting events and to demonstrate the consciousness and motivation for participation of these volunteers.

The findings of the study are as follows.

- 1) Most volunteers of the request type have a tendency to fall into one of two categories: either these with a rich experience or these who are participating for the first time.
 - 2) The motivation for participating for volunteers of the request type can be classified into five factors: “contribution to community”, “self-actualization”, “leisure”, “sport”, and “request”. The motivation for participating for volunteers of the request type demonstrates a similar tendency with that of general volunteers.
 - 3) It can be assumed that younger volunteers have on intense consciousness to participate being requested for the region compared with the general volunteers.
 - 4) It is suggested that volunteers of the request type can enjoy great satisfaction and continue in the future.
- And It is not important for volunteers of the request type to receive wages.

Keywords: volunteers of request type, participation motive, regional sports events

